

明弘の「」で囲まれたセリフの収録をお願いします。
音声ファイルの最初にはお名前をお願いします。

『シーン1 アスラとの戦闘』

明弘「くるぞっ！ 咲夜、援護頼む。」

咲夜「おまかせっ」

明弘「セラっ、バイラヴィを何とか守れ！」

セラ「はい、明弘っ……気を付けて……………」

視線の先に金色色の塊が見えた。

神々しく光り輝く姿……あまりにも美しすぎる人類の天敵……………アスラ

「苦しみに祝福を……………」

「憎しみに終止符を……………」

「その魂に安らぎを……………」

まるで仏や神々のような姿……人類に対するイヤミだろうか？

セラ「観世音（かんぜおん）タイプB、数10」

美しい姿と美しい歌声に一瞬、見とれた。

何度見ても奴らは美しい。

明弘「咲夜っ、対神誘導弾！」

咲夜「言われなくても解ってるって。対神誘導弾全弾発射、

いっけえええええ」

パールヴァティから無数の対神誘導弾が発射され、

観世音タイプBに吸い込まれる。

セラ「観世音タイプB、8体の撃破を確認」

明弘「あと2匹かっ……オーバーブースト、セラ、排気に巻き込まれるなっ」

セラ「はいっ」

30秒限定のオーバーブースト……重力制御シートでも、
体が押し付けられ息が出来ない。星が線のように伸びる。

光速の100分の1の速度、こればかりは宇宙空間でしか味わえない。
観世音タイプBが爆炎の中から現れる。

明弘「もらった！」

トリプラのレーザートマホークが観世音タイプBを切り裂いた。

セラ「明弘っ上ですっ」

明弘「わかってるぜ、くたばれっ」

機体を一気に垂直に立てなおし、最後の一体に超接近状態で一撃を加える。

観世音タイプBのどてっばらに風穴が開いた。

しかし、観世音タイプBの腕がトリプラに届いた。

機体が揺れる。

くそっ近すぎたか？

「もう……いいんだよ……そんなに……苦しまないで……」

明弘「だまれクソがああああああ」

近接用機関銃フアランクスを連射する。

観世音タイプBの体が引きちぎられる。

接近しないと使えないがフアランクスの威力は本物だ、

神切り包丁のあだ名はダテじゃない。

粉々になった観世音タイプBの残骸を旋回で吹き飛ばす。

オーバーブーストが切れる。

明弘「見てるかっクソども、俺は今日も生きてるぞおおおっ」

俺はいつものようにカメラに向かって咆哮した。

『シーン2 戦闘後』

明弘「おーい、生きてるか空」

空「はあっはあっ……おっおええ……」

明弘「何もしてない奴が一番戦った感があるな……」

セラ「相変わらずお見事です。」

明弘も咲夜も……さすがうちの基地のエースですね。」

明弘「はっはっは……『人類の』エースと呼んでくれっ」

咲夜「セラ、明弘をあんまりほめ過ぎない、調子に乗って無茶するから。」

明弘「調子に乗った時のオレ様がどれほど最強か知ってるだろ？」

咲夜「ふん、まあアンタが落ち込んでる姿なんか想像も出来ないケドね。」

こうして咲夜と軽口を叩いている時、なんかイイ。

セラ「本部……敵小隊……殲滅完了……任務成功です。」

帰投許可を……はい。了解です。」

セラ「帰投許可が出ました。作成終了です。」

明弘「さて、レトリバー小隊。これより帰投する。オーバー？」

前のリーダーのセリフそのまま、帰投を告げる。

『シーン3…セラと喧嘩する』

明弘「迎えに行く事が認められないって…何だよ、それはっ!!」

セラ「地球統合軍作戦本部はバイラヴィと

パールバティをMIAと判断しました。」

明弘「MIA…作戦行動中行方不明…」

クシャトリアシステムの動画は送られて来てるんだろ？」

セラ「はい、月軌道に向けて加速中ですが…」

突如出現したアスラの大群に追尾されています。」

明弘「あのクソシステムで咲夜が死にゆく姿を配信中って訳かよ…」

俺はたまらず、セラの胸ぐらをつかむ。

セラ「本部は…突如出現したアスラの大群から地球を

守る事を最優先としています。」

明弘「だったら、俺一人で行く。それなら問題は無いだろ。」

セラ「地球統合軍作戦本部に申請してみます。」

ドゥルガーには通信機能があり作戦本部と直接通信が出来る。

セラ「申請は却下されました。明弘はヴァン・アレン帯軌道の守備が

命じられました。」

明弘「なんで俺が地球の直掩（ちよくえん）なんだよっ、

今までヤバイ最前線ばかりだったのに。」

セラ「地球統合軍作戦本部は…レトリバー小隊…」

明弘を最精鋭として評価しています」

セラ「なので…地球の最終防衛線に配置した、との回答です。」

明弘「くそっ…せめて月での迎撃に回してくれっ、セラ申請しろ、早く!!」

セラ「申請しました。……………回答は却下……………です。」

怒りで手が震える。

セラ「新情報です……………」

明弘「なんだ？早く言えロボ女っ！！」

俺はセラの首筋を締め上げる、人間の力ではドウルガーに苦痛を与える事は出

来ないかもしれないが、自分を抑えきれない。

セラ「地球統合軍作戦本部は、月の制空権放棄を決定しました。」

明弘「それは、どういう事だ……………答えろっセラ！！」

セラ「……………咲夜と……………空は……………」

セラ「もう……………帰って……………かえって、これないという事なのですよっ！」

セラ「私には、どうしようも無いって事なのですよ明弘！！」

セラは俺の手を払いのけ、崩れ落ちた……………

セラ「さくやあああ……………空……………ごめんなさい……………」

「ごめんなさいなのです……………うわああああああ……………」

地面に突っ伏しながら、子供のようになきじやくるセラ。

俺はコイツのこういう処が心底…大嫌いだ。

明弘「くそったれっ」